

長編『兼ちゃん』

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(一四) 卯

お芳は膝の上に『家庭の友』を置いて、一くさり編物をやりかけて、

「之アたゞちいさなストーブで火を焚けばいゝんだ。すると卵がひとりでに孵へるんだと。たいしたもんだね。」

「全くだな。」と吉藏はうけて「何ていふ名前だつて？ 鶏のホランキ(孵卵器)？ エ？」

「孵卵器ツていふの」とお芳はそのページに眼を移して「熱で雛鶏ひよっこがかへるんだね。」

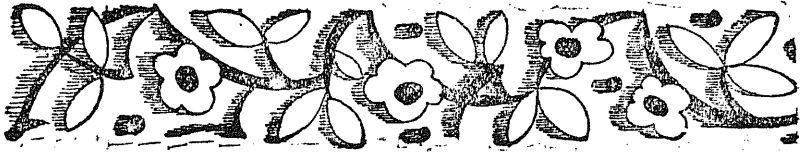
「何故、ひよつこは、うで卵するときに出て來ないの。」と兼公が訊いた。かれは臺所の床で積木で家を作つてゐたのを打捨うつけつて父親の膝へと進みよつた。

「母ちゃんに訊いてごらん。」と吉藏は笑つて「おめへは、よく何かきゝたがる奴だな！」

「母ちゃん、何故……………」

「お前はもう寝る時間だよ。」と母親が注意した。

「だけど、どうして、ひよつこは……………」



「それアネ、そんな時出て来るとお湯ン中で溺死してしまふから。」とお芳は性急にいつて

「さ、お父ちゃんにお休みなさいして……」

「あゝ、だけど何故……」

「沸騰つてるお湯は熱くてひよつこが困るんだよ。」とお芳は兼公がどうしても聞かうとするのに我を折つて「親鶏が暖めておてくれるんだとひよつこに思はせなくつちやいけまい。ネ。」

「あたいがもし卵を五徳の上に載せて置いたらひよつこが出るかね。」

出るもンか。焼けてしまふよ。いゝ鹽梅にぬくめて熱すぎないやうにしなくつちや。お前が床シ中にある時みたやうに。ね、さうだらう。」

「あゝ……あたはまだ眠くない。」

「も少し起しておいてやれよ。」と甘い親父がいふ「おめい、こんな話きいた事あるかい。」と可笑さうな眼をしてお芳にむかつて、「ある牝鶏が卵だと思つて十日も十五日も石ころを抱いてたつて、ハ……」

「ま、馬鹿くじしい！」とお芳はお愛想に笑つた。

「鶏その石堅いとおもはなかつたかね。」と伴は大真面できいた。



「さア、どうだつたらうな。」と吉藏はにや／＼してゐた。

「馬鹿な鶏だね。」と兼公は輕蔑したやうにいふ。

「冗談にやつたんだよ。」と吉藏は申譯みたような事をいふ。

「さ兼坊、もう時間が來たよ。」と母親は首を振つてみせた。

「あたゐ眠くないの。」

「眠くない？ そんなら何故今欠伸かたむねをしたの。」

「欠伸しやしない。」

「それぢや何をしたの。」

「あのう……たゞ口を明いたの。」

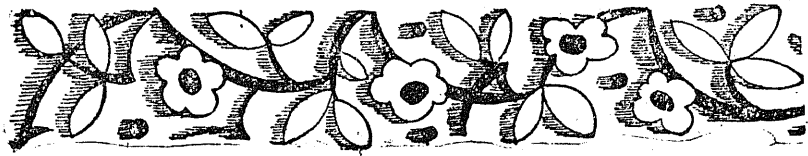
「人を馬鹿にしてゐる。たゞ口を開いたんだつて？ お前の眼つたら眠くつてトロ／＼し

てゐるぢやないか。さつきから擦つてばかりゐるの母ちやんちやんと見てゐたよ。」

「いゝ子だなこの坊主は。」と吉藏は煙草をつめながら「おいで坊、寝るまへにお父ちやん

が抱ツこしてやるから。」

「いけませんよ。」とお芳が抗議を申込んだ。「お前さんの膝の上で眠つてしまふとあとで床へ入れるのに厄介だから。さ兼坊、カラを外して上げるからこゝへおいで……獨りで靴の



紐はとけるだらう。……あらいやだ、また靴下に孔があいて、一寸この踵をごらんよ、お前さん。親子揃つてかうだもの。二人とも孔あけの名人だね。踵でなけれア指先、指先でなけれア踵、踵でなけれア……まアくいや、今迄つゞくつて来たんだからこの先もつゞくるか。」とあきらめたように微笑して、兼公がもう片方の靴の紐が解けないで困つてゐるのを屈んで手傳つてやつた。

x x x x x

それから二日ほどして、丁度日曜の朝だつたが

「ちよいとお前さん、兼坊はどうしても起きないんだよ。氣持が悪るいといふの。」

「そうか!」とひげを剃つてゐた吉藏は剃刀を下へ置いて「氣分がわるいつて! 行つて見てやらう……!」

「今すぐでなくつていゝよ。今眠つてゐるらしいから。お前さん、もしか……もしかきのふ外へ連れていつて甘いものを喰べさせたんぢやないの。」

「そんな事はない。あいつの食べたのはおめいの知つてる通りだ、そら、あのちいさな豆板だけさ。胸がわるいつていつてるのか。」

「いゝえ、そうも言はない。たゞ氣持がわるいんだつて。どこも悪るさうに見えないけれ



ど、何だか氣になつてね。」

「おら……おら昨日五錢玉あいつにやつたがな。」と吉藏は間を置いて、言ひにくさうに
状した。

「それだもの……」

「だけど、甘いものは買はないつて言つたから……きつと買ひはしめいと思ふ。」

ひよつとしたら、おせんべでも買ったんぢやないか。何だつてお錢をやつたのさ。」

「呉れツていふから。きつとたゞ疲れかも知れない。」

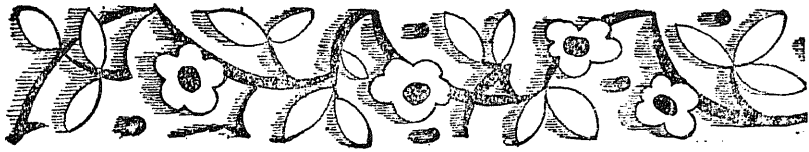
お芳は首を振つて、茶箆笥の戸を明けた。

「肝油をのませるのか。」

「あゝ……眼が覺めたら。お前さんね、もちツと氣を付けてあの子の欲しがるものをなん
でもやらないやうにして下さいよ。とにかく髭を剃つてしまつてお飯お上り。おまいさん
千代坊のネルの襦袢を知らないかい？ あの赤いの。めつからないんだよ。昨夜ゆべ寝るとき
には着物の傍にたしかにあつたんだがね。」

「おら氣が付かなかつた。」と吉藏は張合なさうに答へて沈んだ様子で髭を剃つてゐた。

「ほんとに自烈たいツちやない。」とお芳はぶつ／＼言ひながら「かう物忘れをしちや……」



千代ちゃん、お前ネルの新しいいゝお襦袢を着てるンぢやあるまいネ。」ときいて見ても千代ちゃんは座蒲團の上に乗つて、玩具の笛を吹いて嬉しさうにしてゐた。「千代ちゃんのパンとお乳がもう出来たよ。」とお芳が言ひ足すと千代ちゃんは一層盛に吹き立てた。

朝食後にお芳は眼の覺めた兼公に改めて問ひ訊した。

「すこしは快くなつたかい。」

「うゝん。」

「どうしたのだ。」

「どうしたんだか知らない。起きたくないんだよ。」

お芳は病氣の原因だと推せられた五錢玉の事を言ひ出すのを控へて、

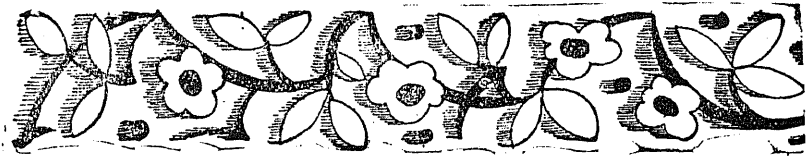
「すこし肝油を飲まなくつちやいけまい。」といつても兼公はおとなしく沈黙してゐた。

「すこしお飲みな。そしてそのあとで朝ごはんを食べてごらん。」

「あゝ。」

兼公は悪びれずに一口薬をのみ、そのあとで朝食をたべたが、その分量の多いのに母親は不思議を抱くくらゐだつた。そして彼はまた一ト眠りするんだつて言つた。

「一寸」とお芳は吉藏に向つて「兼坊はどうしたんだらうね。お腹が減つてそして眠いんだ



よ。昨日五錢玉で何を買つたんだかそれが分るといふネ。何か毒になるものぢやないか知ら。金子のうちへいつて初ちやんはどうもないか聞いて來ようと思ふ。ゆうべ初ちやんと兼坊と二人一所に戸外にゐつたから。」

「そうだな。あいつ何か食べものを初ちやんに貰つたんぢやないか。」

「そうかも知れない……私が居ない時に兼坊が眼を覺ましたら、お前さんの五錢で何を買つたか言はしてごらん。ね。」

「あゝ……錢ぜになんかやつてわるい事したな。」

「まア、仕方がないやね。これから氣を付けてさ、子供だもの何でも解つてるツていふわけに行かないから。」

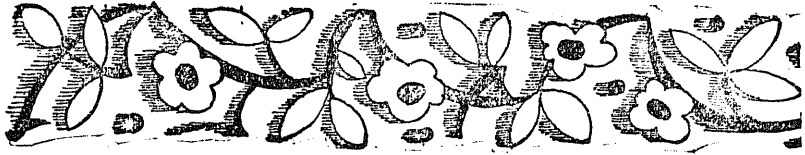
お芳は千代ちやんを連れていつたので、獨りになつた吉藏は、兼坊の床の傍へ行つて心配さうに子供の顔を眺めてゐた。その中に兼公は眼を明いた。

「こら坊や」と吉藏は懸命に陽氣をよさほうて「起きて見るか。」

「うゝん。」

「ちつとも快よくならないか。」

兼ちやんは快方でない旨を物憂げに身振りで見せさせた。



吉藏は咳拂ひをして、

「お前お父ちゃんが上げたあのお錢あしをどうした。」と懇ろに尋ねた。

「費つかつちやつた。」

「そうか。何に費つた。せんべか。」

「うゝん。」

吉藏はまあよかつたと思つた。「何を買つたの言つてごらん。」

「あたい……今に教へて上げる。」と兼公はさんぐ躑躅たぬちつてからそれだけ答へた。

「昨日豆板たべてから、また何か甘いもの貰つたかい。」

「うゝん……お父ちゃん、豆板おくれ。」

「今はいけない。お前病氣なもの。」

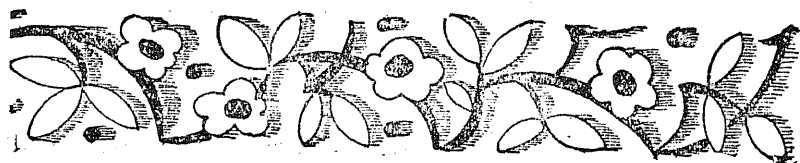
「だけど、あたいそいふ病氣でないだよ。」

吉藏は困つたややうに頭を振つて永い間黙つてゐた。

「お父ちゃん」としまひに兼公がきり出した。「ひよつこはね、どの位た経つと卵から出てくるの。」

「エ？」

「エ？」



兼公は顔を赤らめて今の質問をくりかへした。

「お父ちゃんもよく知らないが、母ちゃんが読んでゐる雑誌には二三週間と書いてあつたようだ。」

「ウーン？」と兼公が放つた一聲は狼狽驚愕の極みだつたので、親父はびつくりしてしまつた。

「どうしたんだ兼坊。」

「あたい、もう起きやう。」と兼公は大真面でいふ。

「快くなつて來たのか。」

「あ、大變よくなつた。」

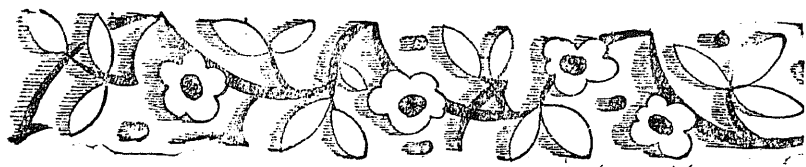
「一體お前どうしたんだ。」と吉藏は急にしかも優しく尋ねた。

兼公は父親に抱かれながら、一すゝり鼻を擧つてこみ上げる涙をのみこんで、

「あた……い……あの……ひよつこが出てくるかと思つたんだ。」と途切れ〜に呟いた。

「ひよつこが？」

「あゝ、だげどあたい……床中に……二……三週間も……こもつてゐられない。」と言つて彼は夜着の中からそツと赤いネルの襦袢を出し、それを解き擴げて卵を一つ取り出した



「あたい、これ五錢で買ったの。卵やの小父ちゃんかひよつこなんかコン中に居ないっていつたけれど……あたい居るかと思つて……暖かくちやんとしておいて……やらう……」

「そうかく分つた。」と親父は始めて悟つたがにたりともしないで慰めてやつた。

お芳が歸宅してその話をきいた時、この時も思ひやり深い態度をとつたが一向感傷的ではなかつた。

「ちやその卵をお夕食にうで、上げよう。」と母親はいつた。

「あたいフライにした方がいゝ。」ともうすつかりお機嫌になつた兼公は言つた。

(一四) 了り

幼稚園令發布につき挨拶の意を表するため、野口援太郎、田中三郎、倉橋惣三三氏が全國保育聯盟

を代表して、四日、文部省を訪問せらる。